

第5講：出直し

福井 孝三 Kozo Fukui

金子 昭 Akira Kaneko

【展開編】

福井孝三

死は人間にとって、時には、過酷であり、受け入れがたいものである。亡くなって行く人の恐怖感や孤独感、その死を見送る家族や関係者も言葉にならないほど、悲しく寂しいものである。しかし、人間は親神の深いおはからいによって「生かされ、生きている」。その事実は厳粛に受け止めなければならない。毎日の計り知れないほどの親神のご守護に対して、懸命にお応えする意味においても、生きる姿勢を見せていくことが求められている。

「死」と「出直し」について、『改訂天理教事典』では、「死」は「この世での生の終結」であり、「出直し」は「この世に再び生まれかわってくるための、やり直し、出直しの出発点」とある。「死」が人間にとってどうすることもできないこの世での終着点であるのに対して、「出直し」はこの世に再び生まれかわってくるための出発点であると言える。息が絶えて身体の全ての部分の動きが止まったときを人生の終着点とみるか、新たな出発点とみるかで捉え方が異なる。

「出直し」という言葉は、「出直し選挙」等一般的にも広く使われている。国語辞典には「一度戻って、改めて出かける」、「振り出しに戻って、やり直す」という二つの意味が書かれているが、いずれもある場所からある場所への移動が示唆されている。また、「出る」という動詞は、「足が線から出る」「風呂から出る」「部屋から外へ出る」のようにある境界線を越えて外へ出て行くという意味を含み持つ。

この世と親神のもとを行き来する主体はたましいである。そのたましいはこの世から親神のもとへ、そして、親神のもとからこの世へと往来している。それはまた古くなった身体を親神に返して「出直す」ときと、親神から身体を借りてこの世（来世）に「生まれ出る」ときを示しており、陽気ぐらしに向けた生命の循環の節目が「出直し」と「生まれ更わり」という言葉で表現されているのである。

一方、『天理教教典研究』（平野知一）には「人間は死ぬのではなく、新たに生まれ更るのであり、此の世に出直すのである。」とあり、「出直し」がこの世に新たに生まれ出る場面で使用されている。また、「この世に出直す」という表現は、「この世に生まれ更わって戻って来る」という意味で他にもいくつか散見される。「出直し」が、途切れることのないたましいの営み、生命の循環の節目を言い表し、「この世に出直す」ということが、新たな可能性を秘めた人生のやり直し、「生き直し」と捉えることもできる。

この世に出直して来たたましいには、前生から引き継ぐ可能性のある生き方を内に秘めており、その生き方は今生の生き方次第によっては良くも悪くも変化すると教えられている。「出直し」は生きることのやり直しであると同時に、今生をどう生き直すかとみなすことができるのであって、いわば、この世での生き方が問われていると意義づけることができよう。

【教理編】「出直し」の教理・再考

金子 昭

天理教の教えが陽気ぐらしの教えである以上、どんな人がどんな結果としての死を迎えたとしても、その人は必ず陽気ぐらしの中に回収されていくものである。どんな生、またどんな死も親神に守られた死である。これを保証するのが「出直し」の教理である。

出直し《自五》という複合動詞は、「引き返して改めてまた外出する」「最初から改めてやりなおす」という意味であり、「みかぐらうた」六下り目での「出直し」の用法もこれに立脚している。ここで提示された「やり直し」、「反復」という含意が死を「出直し」と受け止め直すことにつながる。

死んで「出直した」後、その人はまた別な個人に「生まれ変わる」。「今生」を閉じることが「出直し」となれば、「来生」を開始することが「生まれ変わり」と表現される。このサイクルを個人レベルで捉えれば、「個人のいんねん」での説き方になる。そこでは、「生まれ変わり」「出直し」もせいぜい数世代単位、その範囲も狭い親族の中でのみ考えられる。男は男に、女は女に生まれ変わるということも言われている。

しかし、どんな「個人のいんねん」であっても、それは「元のいんねん」に根ざしている。「元のいんねん」に立脚した「生まれ変わり」「出直し」は、「九億九万九千九百九十九年」の昔に、月日親神がこの世人間を創造したときから今日まで続いている。この長い年月の間、人間は虫鳥畜類に生まれ変わり、三度も大きな絶滅を経験もし、「めざる」が一匹だけ残ったこともあった。このような壮大な人類史はひとえに「病まず死なず弱りなきような」究極の未来における陽気ぐらし世界の実現という最終ゴールに向けられている。しかもこの最終ゴールは、究極の過去である人類創造のスタート地点で親神自身が設定したものだ。

出直しの教理もまた、この「元のいんねん」に焦点を当てた信仰の中で考え直してみてもはどうだろうか。例えば、男は男に、女は女に生まれ変わるということも、決して断定できるものではない。過去と未来に向けて無限に「生まれ変わり」と「出直し」を延長していけば、自分はノーマルな異性愛者だといっても、過去生（未来の生）のどこかでLGBTであった（ありうる）かもしれない、そうすると今生、男女の性的差異にこだわり、それで人を差別することがいかにおかしいことか分かるだろう。また、人間が虫鳥畜類に八千八度の生まれ変わりをしたということは、どんな生き物もまた、たましいの兄弟姉妹であるということも可能である。そして今もなお、虫鳥畜類は「生まれ変わり」をしていると考えてもおかしくない。そのように考えれば、21世紀のエコロジーの時代に真に相応しい天理教学が構築できるとも期待できよう。

出直し、そして生まれ変わる主体は「たましい」である。我々はそれぞれの肉体という今生の“着物”を着ているが、過去生においてはさまざまな“着物”を着てきたし、来生に生まれ変われば、また新しい“着物”をそのつど次々と着ることになる。それが無限の繰り返しであれば、“着物”を着換える主体である「たましい」は不死であるとも言える。そして、我々の個々の人生は、「やまず死なず弱りなき」究極の陽気ぐらしという最終ゴールに向かう、絶えざる「生まれ変わり出変わり」の一駒として存在するのである。